# 調べたり考えたりしことを表現し，語り合うことで多面的な見方を広げる子ども

## －　６年「室町文化とわたしたちの"日本"とのかかわり」の実践から　－

### １．授業の構想

学習指導要領の改訂に伴い，「調べたり考えたりしたことを表現する力」の育成が社会科では重視されたことは周知のことである。それは，従来の「調べたことを表現する力」の育成では，調べ活動によって得た知識を，丸写しし発表するという授業で終わってしまい，知識が断片的で関連づけられていないという反省から生まれたものである。調べ活動や資料の読み取りによって得た知識を活用して思考・判断し，表現することによって，知識を関連づけたり，視点をもってまとめたりする必要性がより高まってきたともいえる。

本学校園社会科部（以下社会科部と略す）では，「子どもの発達段階に即した社会認識の育成をめざす社会科学習」として，子どもが調べたり資料を読み取ったりした知識を，構造的にネットワーク化できる授業づくりに取り組んできた。本年度は，思考力・判断力・表現力の育成を重点に研究に取り組むこととしている。社会科部では思考を，見学したり資料を読み取ったりして得た知識であるものを，関連づけたり，「中核となる視点」でまとめたり，比較して新しい視点でまとめたり，総合的にまとめて社会的事象の特色や概要を明確にしたりすることと考える。判断を，思考したことを事実かどうか吟味することと，自分なりに価値づけることと考える。表現は，目的とされるものと手段とされるものがある。前者は，例えば新聞や紙芝居の作成などで，他者に伝えることそのものが活動の目的であるものである。子どもたちは，それらのために調べ考える。それに対して後者は，調べたことを考え，判断したことを他者に伝えることで，例えば話し合い活動やディベートなどである。構造的な知識のネットワーク化を図り，多面的な思考力・判断力を育てることをめざす社会科部は，両者とも自分の意見を主張するだけで終わらず，他者の意見を聞いたり質問したりして，より多面的な思考・判断ができる場を設定する必要があると考えている。

本単元は，６年生内容(1)エに関するものである。これは，学習指導要領の改訂に伴って新設されたものである。ここでは，室町文化について理解し，今日の生活文化に直結する要素をもつことがわかることをめざしている。現代の日本の生活に根付いていることがわかるためには，子どもたちが室町文化をどのように理解するとよいのかを考察することが，本単元のかぎとなると思われる。

室町時代の文化とは，２つの大きな流れによって成り立っている。１つは，中国の宋で生まれた禅の文化である。これは，日宋貿易によって「唐物」を珍重するものとして武士を中心に広がっていったものである。もう１つは，民衆が生み出す文化である。これは，平安時代より貴族や寺社で行われたことが，少しずつ民衆に広がっていったものである。平安時代より始まった田楽や猿楽をもとに能や狂言，鎌倉時代の念仏踊りから盆踊りが生まれた。また，御伽草子によって人々の願いや生き方をより多くの人々が共有できるようになってきた。その中で応仁の乱は１つの室町文化のエポックとして挙げられる。２つの大きな流れが，「唐物」から「漢和融合」へ，「完全さ・荘厳さ」から「わび・さび」へと融合されていく。それは，義政造営の慈照寺観音殿，東求堂(以下銀閣とする)で具現化すると考えられる。義満造営の鹿苑寺金閣(以下金閣とする)と比較すれば，金閣が荘厳で中国風なのに対して，銀閣，そして東求堂は質素である。しかし，そこに日本人が大切にするものが多くある。それが，畳，障子であり，そこで行われた「侘び茶」「華道」である。これらは，我々日本人の大切にしたい文化である。

本単元での思考は，調べた知識をもとに室町文化の特色について考えることである。判断は，一人ひとりが考えた室町文化の特色が事実であるかどうかを吟味すること，さらに友だちの意見を聞いたり，もう一度調べたりした上で自分の考えを決定することである。表現は，室町文化の特色についての自分の考えを表明することである。判断をより確かなものにするためには，多面的な思考が必要であり，知識も多く必要となってくる。しかし，文化的な事象として，金閣，銀閣，墨絵と資料集にあがっているものだけでも９つある。それに付随する知識として，足利義満，義政などのものを数えれば十数個の知

識となる。関連づけたり，分類したりする知識のネットワーク化を行うだけでも難しい。表現することを通して，クラス全体で判断し，より多くの知識による多面的な思考ができるようにネットワーク化が図れるようにしたい。

本学級では歴史に対しての興味のむき方に2つの傾向がある。それは，さまざまなことを知りたい子ども（以下，知識先行型と呼ぶ）と今の生活からみて「こうあってほしい」と願いながら歴史的事象をみていく子ども（以下，願い先行型と呼ぶ）である。知識先行型の子どもたちは，事実をより多く集めていく傾向にあるので，知識が網羅的なものとなる。もう1つの願い先行型の子は，願いについて合致するような事実で判断する傾向があり，総合的な思考が難しい。

本学級の歴史的学習における実態をいかした上で，子どもたちが多面的なものの見方・考え方ができるようになるために，2つの手立てを行う。1つは，室町文化について見出しをつくることである。見出しをつくることによって，2つの傾向の子どもたちのものの見方・考え方が，話し合い活動によって融合し，より多面的なものの見方・考え方を生み出すようになると考えるからである。知識先行型の子どもは，室町時代の新しい文化をより多く調べていくだろう。また，願い先行型の子どもは，「武士らしい金持ちではない文化であってほしい」と，願いにあった文化がないのかを調べていくだろう。その後の話し合い活動によって，子どもたちは自分とは違う見方・考え方に触れ，2つの傾向の見方・考え方が融合し室町文化についての理解が，より広く深いものになっていくと考えられる。

もう1つは，調べ活動と話し合い活動を2回繰り返して行うことである。室町文化はさまざまな文化が生まれたこと，同じ時代でも文化の様子が変化していっているという2つの特色がある。1回目の調べて話し合う活動において，自分の考えだけでなく，違った角度からの友だちの考えを聞くことによって，さまざまな文化が生まれたことに気づくだろう。そして，2回目の調べ活動では，友だちから教えられた角度からの調べ活動を行うので，年代によって文化の性格が変化していることに気づき，室町文化の2つの特色についてより多面的に見たり考えたりすることができるようになる。

以上，2つの手立てによって，本単元のねらいである，室町文化を調べ，考えることを通して，室町文化が，その時代の人々が自分たちにあうようにつくりあげていったことに気づき，自分たちの生活に今でも根付いていることを理解することをめざす。

そこで本単元では，まず初めに室町時代前期の図を紹介する。これは，人を招くために，中国の絵や壺などを並べた部屋のイメージ図である。ここで2つの反応があると思われる。1つは，室町文化イコール金閣で，室町文化は派手で金持ちの文化というイメージをもつものである。金閣や3代将軍義満が天皇も倒し貴族，武士，天皇の頂点に立った事実からこの図は当たり前だと考えるだろう。もう1つは，鎌倉時代の武士の生活や生き方から質素なものを好むので金持ちではなく武士を中心とした人々が生み出す文化というイメージである。鎌倉時代の武士が農民であり，自分の土地を守ることを1番大切にしていたこと，元寇後に恩賞がもらえず鎌倉幕府を倒した武士達で室町幕府がつくられたこと，さらに「早く農民達も文化に参加してほしい，日本らしい文化が生み出されてほしい」という願いをもっているからこの図はおかしいと思うだろう。従って，室町文化についての予想について見出しをつくる活動においても，前者が金持ち文化や派手な文化という見出しをつくるのに対して，後者は今に伝わる文化やこの図のような文化から変化していく文化という見出しをつくるだろう。そこで，このあと2回目の見出しをつくり，室町文化の変化と学習した自分の考えの変化に気づかせたい。2回の調べ活動と話し合いを保障するために，単元のめあてを「みんながなっとくする『6－2これが室町文化！！』という見出しをつくろう！！」とし，追求活動を進めていく。

2時間目では室町時代の文化について調べることとする。予想した見出しが確かなのかを調べる。そして，調べたことをもとに見出しをつくり直す。見出しは，1時間目の図についておかしくないと反応した子どものつくるものと，おかしいと反応した子どものつくるものに大きく分かれるだろう。顕著に差が現れるのが「金持ち文化」「派手な文化」と「武士などがつくった文化」「渋い文化」なので，それについて3時間目において見出しとその理由を発表する場をもつ。そこで，さまざまな人たちが文化を生み出したことに気づくと思われる。話し合いによって見方・考え方を広げ，深めていく過程で，室町

文化は時代によって文化の特色が変化していったこと，今にも伝わる文化であることがいえるのではないかという気づきが芽生えてくると考えられる。そこで，４時間目では友だちから教えられた角度からもう一度調べ直し，その後見出しをつくり直すこととする。

５，６時間目では，みんなが納得する見出しをつくるためにクラス全員で話し合い，見出しを作成する。さまざまな文化が生まれてきたこと，義満の金閣のように派手な文化が，だんだんと質素な文化へと，そして武士以外の人々も文化を生み出していくようになったことを知った子どもたちは，少しずつ変化していく室町文化について気づいていると思われる。そこで，変化に気づいた子どもたちは，現在の生活文化に直結する文化が生まれていったことについて話し合い活動を深めることによって気づいていけると考えている。

## ２．活動展開計画（全５時間）

| 主な学習活動 | 時間 | 具体的な学習活動 |
|---|---|---|
| 室町文化の特色にあった見出しを考えよう。 | 1 | ・義満のころの「茶会の部屋の想像図」をみて気づいたことを発表し，室町文化を予想して見出しをつくり，それが正しいのかを確かめるために何を調べるとよいのかを明らかにする。 |
| | みんながなっとくする「６－２これが室町文化！！」という見出しをつくろう！！ | |
| | ２３<br>４<br><br>５６ | ・自分が予想した見出しが正しいのかを調べ，室町文化の見出しを考える。<br>・見出しとその理由を発表し，それぞれの見方・考え方に触れ，共通点や相違点を明らかにする。<br>・友だちから教えられた角度からもう一度調べ，見出しをつくり直す。<br>・クラス全体で見出しを考え，室町文化の特色をについて理解する。 |

## ３．活動の実際

### (1) クラス全体から見る社会認識の発達の結果

本単元を通しての，子どもたちの見出しの変化は下のような結果となった。

| | 導入後 | 調べ活動ｉ後 | 話し合いｉ後 | 調べ活動ii後 | 話し合いii後 | 最終結論 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 金持ち文化 | 25 | 17 | 3 | 1 | 0 | 0 |
| 今に伝わる文化 | 0 | 2 | 8 | 15 | 21 | 23 |
| 変化した文化 | 0 | 2 | 10 | 5 | 10 | 23 |
| みんなでつくった文化 | 0 | 5 | 6 | 8 | 8 | 8 |
| 合　計 | 25 | 26 | 27 | 29 | 39 | 54 |

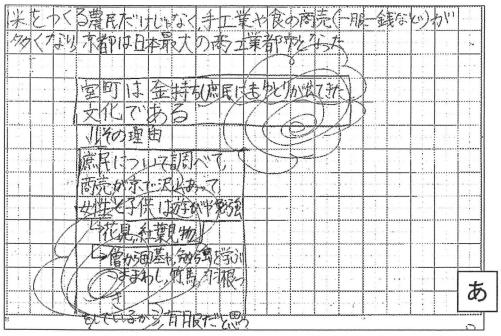
児童数が25名であるので，25以上の数値は複数の視点で室町文化について考えていることがわかる。金持ち文化という見出しをつくっている子どもが，話し合いｉ後に激減している。金持ち文化とは，足利義満が建てた金閣など，室町時代初期の文化の特徴であり，一面的な社会認識でとどまっているものである。金持ち文化という見出しが減ったのに対して，今に伝わる文化と変化した文化という見出しが増えている。さらにその傾向は，２回目の調べ活動と話し合いを経るにつれ多く見られるようになってくる。それらの見出しは，金持ち文化という見出しに比べて，より多くの知識を関連づけるなど，ネットワーク化を図らないとできないものである。

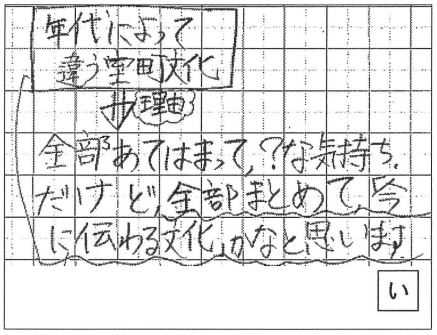
### (2) Ａ児のノートから見る社会認識の発達の結果

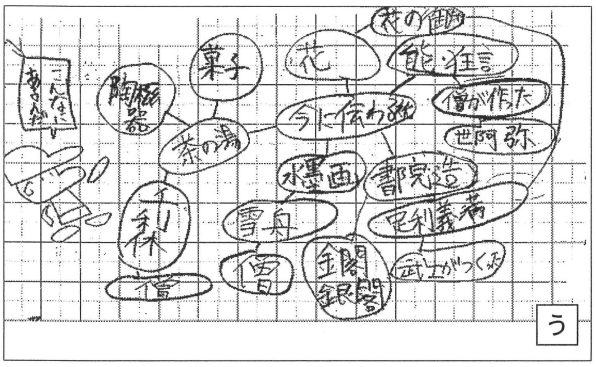
知識のネットワーク化をどのように行ってきたのかをもう少し詳細に検討するために，Ａ児が書いたノート**図１**を中心に，社会認識の発達を見ていこうと思う。

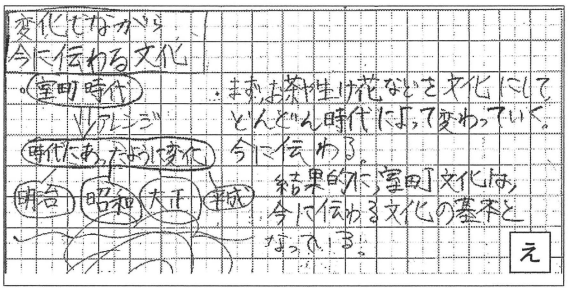
Ａ児は，元寇についての学習後に下のようなふりかえりを書いている。この時のＡ児の室町文化の見出しは「金持ち文化」であり，根拠となる事実は春に修学旅行の見学で得た知識が主なものである。

> 金持ち文化だと思う。竜安寺や金閣，銀閣は私物のために使ったから。金閣は，今の金額で600億円もかかったから金持ちしかできない。（Ａ児，元寇の学習後の発言）



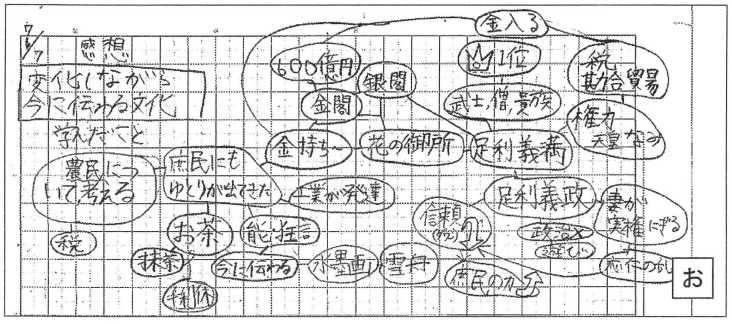




図１　A児のふりかえり（ノート）
あ　調べ活動ｉ　　い　話し合いｉ
う　調べ活動ii　　え　話し合いii
お　最終結論

**①調べ活動ｉにおける知識のネットワーク化**

A児は，導入後「将軍たち力のある武士たちは金持ちになっていったと思うが，農民たちはどのような生活をしたのだろうか」という疑問をもち，農民たちのつくった文化がないのかを調べていった。その結果が，**図１**の**あ**である。産業の発達により農民をはじめ庶民にもゆとりができてきたことを，女性や子どもがしていた遊びや勉強をしていたという知識を関連づけて考えていることがわかる。そして，金持ち文化という「中核となる視点」に，金閣などの知識とともにまとめていったといえる。

**②話し合いｉにおける知識のネットワーク化**

A児は，話し合いｉの授業後，ふりかえりを書く前に黒板のところへきて，「金持ち文化で，庶民にもゆとりが出るようになってきて，変化していっているんだよね。それでほとんどが今に伝わる文化なんだ。つまり，変化しているし…。今に伝わる文化だし…。」とつぶやいていた。

長い間悩んだ末，書いた見出しが，**図１**の**い**のように今に伝わる文化である。A児は，話し合いの中で，ａ）金閣などは，勘合貿易によって莫大の利益を得たことからできたこと，ｂ）苦しい生活をしていたが，京都を中心に庶民にゆとりができてきたこと，ｃ）能・狂言，茶の湯など，多くのものが今に伝わっていること，ｄ）室町文化といっても年代によって変わり，庶民にゆとりができたのは義満のころより後のことであること，の５つを知った。

話し合い活動ｉまでは，ａ）とｂ）を金持ち文化という見出しで関連づけていたのだが，ｃ）の知識を得たことによって，金持ち文化という見出しでは成立しないと判断したようだ。しかし，授業の最後にｄ）の知識を友だちの発表から得たので，ａ）とｂ）は時代によって文化の主体者が違うと考え，はじめは年代によって変わる文化としていた。しかし，今に伝わる文化としてあがった能や狂言などにつ

いて，だれがつくったのかを調べれば武士と庶民など，文化をつくった主体者によって関連づけられるのではないかと考えた。そこで，A児は今に伝わる文化という見出しを仮説として立てて，室町文化の主体者は誰なのかを調べることとした。

**③調べ活動ⅱにおける知識のネットワーク化**

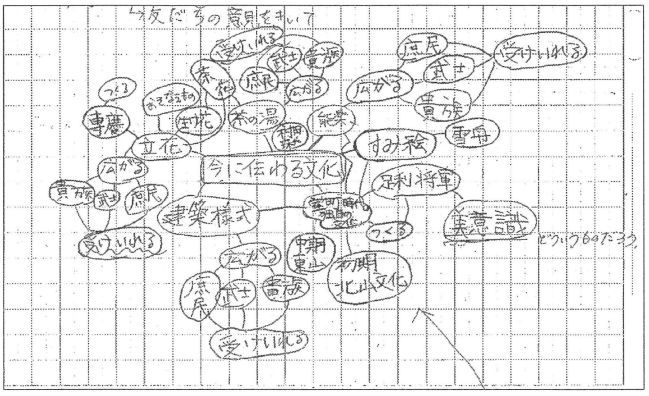



**図２　調べ活動②の後におけるＢ児のイメージマップ**

調べ活動ⅱのあとに，作成したのが**図１のう**である。見出しを今に伝わる文化としているが，このイメージマップをつくっていく過程で，僧が関係するものが多いことに気づいたので，「僧と武士がつくった」を書き入れている。

今に伝わる文化を見出しにして，イメージマップをつくっていく子どもはA児ばかりではなかった。**図２**にみられるように，今に伝わる文化を「中核となる視点」としておき，能・狂言などの知識をまとめている。それは，今に伝わる文化を視点に置くと能・狂言などの知識が簡単にまとめられるからであろう。さらに注目すべき点は，A児が「僧・武士がつくった」という新たな視点で，能・狂言などをまとめているのと同じように，B児は「だれに受け入れられているか」という視点でまとめている。A児のように見出しには加えていないのが，より広い視野で室町文化を考えていることがわかる。

**④話し合いⅱにおける知識のネットワーク化**

話し合いⅱは，２時間にわたって行った。下のふりかえりは，A児が話し合いⅱの１時間目後のふりかえりに書いたものである。

> 意見を聞いていて，C児君の変化していった文化だと思ったけれど，E児君の言っていることは権力の変化みたいで，文化としてはいえないと思うので，僧と武士がつくった今に伝わる文化で変わりません。（A児，話し合いⅱの１時間目後のふりかえりから）

C児の変化していった文化という見出しについては，そのほかの子どもたちからも反応があった。C児は，将軍の力と庶民の力に注目し，**図３**の図を用い，室町時代は「華やかで平和，公平なくらしから暗く渋く地味なくらしへと変わっていった」と考え，変化した文化という見出しをつくった。

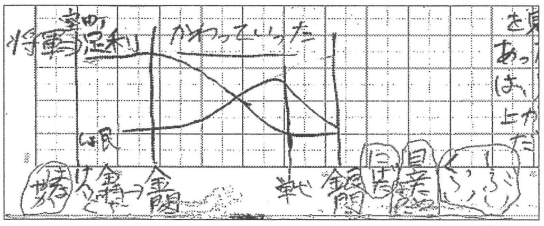



**図３　C児の変化する文化のイメージ図**

A児のふりかえりのように，多くの子どもたちは，C児の考えがわからないまま話し合いⅱの１時間目が終わってしまった。「政治や産業の変化によって，文化は変わってくる」という考え方は，６年生の子どもにとってはなかなか難しい。

そこで，話し合いⅱの２時間目は，変化した文化についてくわしく考えることとした。子どもたちの考えている「変化」を，ア　文化の主体者が武士から僧や庶民へと変わった「変化」，イ　権力，財力の力が将軍から庶民へと変わった「変化」，ウ　中国から取り入れたものを日本独自なものへと変えていった「変化」，エ　派手で華やかなものから質素なものへと変わっていった「変化」，オ　身分が尊重されていたものから実力が尊重されるようになった「変化」，の５つに整理した。

その後，次のような発言が始まった。（C３はC児である。）この話し合いⅱ２時間目によって，子どもたちは「変化」の意味を自分の言葉で表わし，今に伝わる文化と変化した文化を関連づけていることがわかる。C児の「政治や産業の変化によって，文化は変わってくる」ことを，自分たちの経験をふまえ，自分の言葉で説明し合い，結論として「文化は時代に合わせて変化する」というように解釈をしている。

Ｃ１；こうやってみると，変化していったから今に伝わっているんじゃないかなぁと思います。
Ｃ２；でも，明治から昭和に比べたら，今に伝わっているものが少ないから，今に伝わるは，いれない方がいいと思います。
Ｃ３；お茶だって毎日飲むわけではないし，能・狂言なんてみたこともありません。茶室や和室だって今の家にはないし，習慣や親しみが薄くなっていると思います。
Ｃ４；でも松江の人は今でもお茶を飲んでいるし，ペットボトルのお茶を飲む人も多いです。
Ｃ５；それに，Ｃ３君の家には和室がないといったけど，家に花を飾るとかいうのも，ちょんぼし（ちょっとした）「今に伝わる」っていうことじゃないですか。
Ｃ６：Ｃ５さんは，ちょんぼしっていったけど，私は基本じゃないかなぁと思います。室町文化で茶の湯とかができて，たくさんの人に広まっていったから，今も多くの人が親しんでいると思います。
Ｃ７：茶の湯だって，能・狂言だって中国から取り入れたものを日本風にアレンジしたのが室町時代です。室町時代にアレンジしていなかったら今残っていないと思います。
Ｃ８：それに，庶民の力が強くなって庶民たちがつくったり親しんだりしていったから直接じゃないけれど，やっぱり今に伝わっていると思います。
Ｃ９：ぼくはゲームで考えればよいと思います。昔はテレビゲーム？みたいだったのが時代に合わせてＤＳなどに変化していったけど，やっぱり基本はゲームというか…。だから時代に合わせて変化していったんだと思います。
Ｔ１：例えば，Ｃ３君は家に和室がないっていったけれど，外国人の人と比べて，日本人は畳の部屋だと？
Ｃ10：日本人だから落ち着くでしょ。それが室町時代にできたっていうことは，心っていうかそういうものが今に伝わっているんじゃないかな。

この話し合いⅱ２時間目にＡ児が書いたふりかえりが，**図１**の**え**である。今までは，「今に伝わる文化」は見出しに入れていなかったが，現在に残る日本の文化と基本として室町文化が位置づくと考え，変化しながら今に伝わる文化とした。話し合いⅱの後に，変化した文化の見出しを加える子どもが増えてきている。これは，話し合いの結果，「変化」の意味が整理できて，今に伝わる文化になった理由として「変化」があることがわかったからである。**図５**のＧ児の図がそのことをよく表わしている。

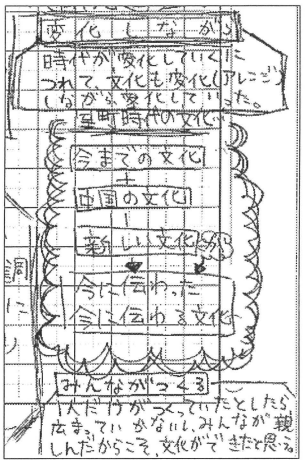


**図５　Ｇ児のイメージ図**

**⑤最終結論における知識のネットワーク化**

最終結論では，今までの学習をふりかえり，調べ活動や話し合いで得た知識をもう一度確認し見出しをつくっていった。Ａ児は，**図１**の**お**のように作成していった。ノートを何度も見返しながら，自分なりに整理していく姿が見られた。

## ４．成果と課題

### (1) 成果

室町文化の特色について理解するために，見出しをつくること，２回の調べ活動と話し合いを行った。**３**．で述べたように，見出しをつくることによって，より多くの知識を関連づけるなどのネットワーク化が図れることがわかった。また，２回の調べ活動と話し合いを行うことで，室町文化の特色を複数個の見出しを関連づけながら理解することができた。２回目の調べ活動では，友だちの考えた見出しを取り入れるために理由となる事実を集めたり，ほかの見出しも関連づけられないかを考えたりした。そのことで，知識は１回目より多くなり，「中核となる視点」が複数になり，多面的に室町文化を理解できるようになっていった。その後，複数の見出しをつなげてよいかどうか話し合った。これは，小学校段階にしては難しいことである。しかし，子どもたちは自分の経験をもとに自分なりの言葉や図で説明することによって，自分なりの結論を見いだすことができた。

### (2) 課題

ただ，調べ活動と話し合いを複数回すればよいというものではない。課題も見えてきた。１つはあまりに膨大な知識が集まり，個々の知識の共有化ができず，理解や判断ができにくいことである。この後，江戸時代，明治維新以降の文化とつなげて学習していくが，時代をおうにつれて知識は増えていく。どれだけの資料の中で子どもたちが考えていけばよいのかを，子どもの実態から明確にする必要がある。それは，２つ目の時数のこととも関連する。調べて考えて表現し，さらに考えることを重視していくこともふまえ，１年を通して計画的に学習活動を考えていかなければならない。　（文責　高木　敏光）